早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０１６年２月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教育実践はどのように改善されるか
—韓国での「ピア・サポート」の試みから—

申請者氏名：崔　鉉弼

主査　川上　郁雄　　署名　川上郁雄　印
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　小宮　千鶴子　　署名　小宮千鶴子　印
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　宮崎　里司　　署名　宮崎里司　印
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

＜本論文の概要＞

本論文は、「日本語教育実践の改善」をテーマにした研究である。申請者は、この「日本語教育実践の改善」がどのような営みかを問い、その改善が可変的かつ流動的であること、および実践の改善に場づくりが必要であることを問題意識として、韓国の高校および大学で日本語を教える教員との協働的実践を通じて、この研究主題を探究した。その意味で本研究は日本語教育の実践研究である。

本論文は、以下の三部構成となっている。第一部（第１章、第２章、第３章）では、問題提起の序論から、実践の改善に関連する先行研究レビュー、研究目的および研究方法を論じた。第二部（第４章、第５章、第６章、第７章）では、実践の改善を行った韓国の日本語教育の概観を踏まえ、高校での実践、大学での実践が詳細に述べられており、それらの実践を踏まえて、研究主題に関する議論として、「ピア・サポート」（日本語教育実践の改善のための協働的かつクリティカルな場作り）という実践の成果と課題、さらに継続的な実践改善のために必要な視点と方法について議論している。続く第三部（第８章）では、本研究の中心的な研究課題である「日本語教育実践の改善はどのような営みか」について総合的な議論を展開している。その結果、言語教育実践は「言語そのものを教育しようとする」言語構造指向性と、「思考の深化や学習者自身と自分自身を取り巻く世界の理解を促そうとする」非言語構造指向性という二つの視点で捉えられるとし、両方の指向性の往還が実践の改善を生み出すとした。換言すれば、その両方の指向性の活発な往還がなければ、「実践の固定化」から脱却できないと結論づけた。

本研究の主な主張は以下の３点にまとめられる。

（１）日本語教育実践の改善のための協働的かつクリティカルな場作りとしての「ピア・サポート」を考案し、その「ピア・サポート」の実践が、実践者のエンパワーメントにつながる。

（２）この「ピア・サポート」を有効に活用し授業を改善するためには、相互尊重を前提とした場づくりと、実践改善につながる対話のパターンを促進し、そのことによって時間的負担の軽減を図ることができる。

（３）したがって、日本語教育の実践は、「言語構造指向性」と「非言語構造指向性」の間を実践者が活発に往還し、その過程を通じて実践を壊し創りながら改善が図られる。

＜本論文の評価＞

本論文は、韓国での日本語教育実践における「ピア・サポート」の実証例から、日本語教育実践の改善に関する省察を試みた点に特徴がある。その実践研究は、以下の点で優れている。

1．明確で、かつ有意義な問題意識のもと、理論と実践に基づいた「ピア・サポート」という方法を考案し、その実践に参加した高校と大学の日本語教師がそれぞれ自らの実践を改善できた例を示した点、および「ピア・サポート」に見られた対話のデータを分析し、実践の改善につながる対話のパターンとつながらないパターンを示した点は、独創性があると評価される。

2．特に、自己発見的（heuristic）と多声的（polyphonic）な場としての「ピア・サポート」に注目することで、どのような実践をデザインすべきかについて、一つの試案を提示した点が高く評価できる。また、「ピア・サポート」に参加する人それぞれをエンパワーし、かつ対話が創生されるとともに、成果を生み出すという流れは、これまでになかった考察として評価できる。

3．また、この議論の中で、日本語教育の実践の改善を妨げるものとして「実践の固定化」という新たな概念を提唱し、かつ、実践の改善とは、実践者が「言語構造指向性」と「非言語構造指向性」との往還を通じて「実践の固定化」を打破することであると主張した点は、十分な説得性を有する。

4．この「言語構造指向性」および「非言語構造指向性」という視点を実践者が持つこと、そしてその両者をめぐる創造性と停滞性を往還することで、実践力が高められるという点は、ややメタ的な説明で、さらに具体的な記述が求められるものの、資質向上を求める日本語教師の新たな自己研鑽の方向性を示していると判断できる。

ただし、本論文には以下のような課題もある。

1．今後、本研究をさらに発展させるうえで、研究的実践者の立ち位置や、「言語そのものの捉え方」と「教育の意味」を行き来する営みとする実践改善を、海外の日本語教師の養成や現職者研修の中で、どのように具現化すべきかは、大きな課題と言える。申請者は、この点に関し、敢えて具体性に固執しないという立場を示したが、実践の改善の困難さに苦しむ実践者に対し、どのように自らの理論を平易に理解させ、真の実践者（アクター）にさせるかについては、本論文では、十分に展開され

ていない。

2．実践の改善につながる対話のパターンとつながらない対話のパターンが抽出されたが、それらは今後の「ピア・サポート」にどのように利用できるのか。研究者的実践者が対話をリードする者として、カウンセラーのように改善につながらない対話のパターンを避ければよいのか、参加者全員が両パターンを自覚して対話に臨めばよいのか等の点も明確化が必要である。

3．「実践の改善につながる対話のパターン」を促すためには、暗黙の前提がなく（つまり、教育現場が異なる）、異なる言語教育観をもつ実践者間での「ピア・サポート」の遂行が望ましいとあるが（p. 173）、同じ教育現場に属する教師間などでは「ピア・サポート」の効果は期待できないのか。「実践の改善につながる対話のパターン」が生じやすいのは、どのような環境かという点も、さらに探究が必要である。

4．本研究は、言語教育実践とは「言語構造指向性」「非言語構造指向性」をもつと主張するが、「非言語構造指向性」は「教育の意味」とも言い換えられている。そうであれば、「言語指向性」「教育指向性」のような命名でも良いのではないか。「非言語構造性」と CEFR の「一般的能力」や「JF 日本語教育スタンダード」の異文化理解能力との関係に関しても言及がなく、曖昧である。これらのタームは、本研究におけるキー概念であるゆえ、さらに多面的な議論も必要である。

5．本研究の「ピア・サポート」が成功したのは、調査協力者と申請者との間に長年の信頼関係があったことも無関係とは思われない。今後、「ピア・サポート」を広めるには、時間的負担のほかにも、どのような関係にある者が行うかという実際的な課題もあるのではないか。この点も、本論文の成果を教育現場に還元していくためには

避けられない課題である。

＜本論文の判定＞

以上のように、さらに考察されるべき今後の課題は残されてはいるが、本論文は、優れた学術研究として高く評価することができる。よって、本論文をもって日本語教育学の博士学位論文に値するものと判断できる。

なお、本論文にあった誤記は「日本語教育研究科博士学位論文修正リスト」の通り、修正されたことを確認した。

博士学位申請論文題目	日本語教育実践はどのように改善されるか ―韓国での「ピア・サポート」の試みから―
申請者	崔鉉弼
修正リスト提出日	２０１６　年　２月　１９日

ページ番号・行	修正前	修正後
p.7・9-10	データのの解釈	データの解釈
p.10・7	データのの解釈	データの解釈
p.9・4-5(下から)	珍しく、海外の大学において日本語講師たちの協働による実践改善のための試みとしては高宮他(2006)がある。	なお、海外における日本語教育の実践者間の協働による実践改善のための試みとしては高宮他(2006)が挙げられる程度で非常に珍しい。そこで
p.12・3	フィールノーツ	フィールドノーツ
p.63・21	フィールノーツ	フィールドノーツ
p.65・2 段落目の 1	学生の自発的な参加する形へ変え	学生が自発的に参加する形へ
p.65・2 段落目の 10	集中度も高いかつ維持されており	集中度も高く維持されており
p.69・6	な先生	ナ先生
p.70・10	結婚式の前の僕のところに来て	結婚式の前に僕のところに来て
p.70・15	生徒たちの学習意欲さえ持たせるものであれば	生徒たちの学習意欲を持たせられるものであれば
p.72・1	ずっとやりたんだから	ずっとやりたいんだから

p.81・5(枠内)	権威的に起こっているようには見えない	権威的に怒っているようには見えない
p.102・5	親戚の勧誘に大学院に進学して	親戚の勧めで大学院に進学して
p.124・2	分析しおり	分析しており
p.152・5(下から)	「問わない」にはいられなかった	問わずにはいられなかった
p.167・4(下から)	2種理	2種類
p.168・6(下から)	フラストテーション	フラストレーション
p.178・20	日本語の語彙の算出	日本語の語彙の産出
p.178・7(下から)	「日本語工場」の算出物	「日本語工場」の産出物
p.181・2	実践び改善の困難さ	実践の改善の困難さ
p.184・13	語用訂正	誤用訂正
p.186・5(下から)	「日本語そのもの捉え方」	「日本語そのものの捉え方」
p.189・13(下から)	学生の解答への語用訂正	学生の解答への誤用訂正

日本語教育研究科　博士学位申請論文修正リスト